

ふるさと再発見！

vol. 6

ほうぼうわかやま

HOUBO

WAKAYAMA



FREE

巻頭特集

紀州古代墨

●紀州の歴史・文化

徳川治宝侯が愛した瑞芝焼

●散策

粉河でぶらり大樹めぐり

●施設紹介

図書館探検隊

司書が選ぶ郷土の本

シリーズ道の駅

「みなべうめ振興館」

しょうえん
松煙の原料となる松が豊富だった紀州。
当時の墨作りとはどのようなものだったのか。
紀州古代墨の歴史をたどってみる。

すみ

墨は、煤と膠を練り固めて作られる。煤は不完全燃焼を起こした際に煙の中に生じるもの。膠は動物の皮などから抽出されるゼラチン質。煤は松を燃やしてとる松煙、菜種などからとる油煙に大別され、近年では量産しやすい重油からの生産もされている。松煙墨や油煙墨は現在、ほとんど作られていない。当時の墨作りとはどのようなものだったのだろう。

墨は石墨にはじまり、墨丸そして、松煙と進化してきた。松煙は紀元前200年ごろ、中国で現在の墨の原型といえる墨ができた。その墨は漆で固めたものだった。その約400年後、膠で固めるという現在の墨と同じものが作られるようになった。

日本には、推古天皇18年（610年）に高句麗の僧・曇徴が製紙・製墨の技術を伝えたという記録が残っている。



photo by T.Kurimoto

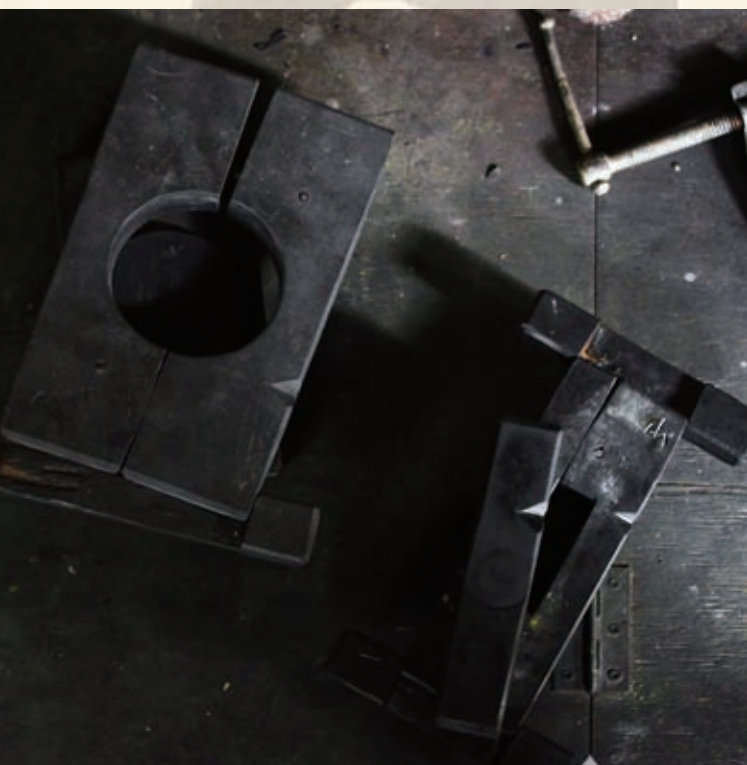
表紙の書：紫舟【シシュ】

書道家。六歳から書を始める。書の本場奈良で三年間研鑽を積み、のち東京へ。
NHK 大河ドラマ「龍馬伝」をはじめ、外務省「APEC Japan2010」、
ハリウッド映画「エアベンダー」や SUZUKI アルトCMなどに作品を提供。
朝日新聞や読売新聞でも長く書の連載をもつ。
海外では「パリコレ」への作品展示や国際会議での招待公演、
国立現代美術館での展示など幅広く活動。
書「龍馬伝」で第五回手島右卿賞を受賞。

<http://www.e-sisyu.com>

紀州 古代墨

消滅と復活、古の墨を訪ねて



この墨

いか程のものぞ

試みよ

紀州では、いつから墨作りが行われていたのだろう。

建長6年（1254年）に

伊賀守橋成季によって編纂

された「古今著聞集」に次の

ような説話が残されている。

後白河院が熊野詣で、藤白

の宿に着いた時のこと。紀伊

国の国司（現在の県知事にあ

たる）が松煙墨を献上したと

ころ、後白河院の「この墨い

か程のものぞ試みよ」という

言葉に、御前に居た左大臣が

右大将に薦めたと、右大

将は硯を引き寄せ、墨をすつ

たが、そのすり方が除目（大

臣以外の官吏を任命する儀

式）のとおりであったので、

左大臣が感心したという。

後白河院の熊野詣は永暦元

年（1160年）に始まり、

建久2年（1191年）ま

で34回に及んでいるが、この

ころに国司が献上するほどの

出来であったということ考

えると、1000年ごろには

墨作りが行われていたのでは

ないかと推測される。



古今著聞集



取材協力 平岡繁一氏

海南で作られていた藤代墨を復元し、現在も体験授業などの活動を通じて墨作りを伝える郷土史家。

お問い合わせ
かいなん夢工房
海南市名高533の4(1番街)
TEL 073-482-5572

する墨のその藤代の秋かけて
たえぬ七日の梶の玉づき
あふことを松にかけた藤代の
墨の名しるき梶の玉章

冷泉為重

幾千歳松にかけたるたかき名も
なおせにしるき藤代の墨
冷泉為久

「紀伊名所図絵」によると、

当時の藤代墨は墨屋谷（現在の

の藤白神社の南東）と呼ばれ
る場所で作られていたとされ
る。熊野詣の入口にあたるこ

の場所では、宮人や歌人がそ
の様子を眺め詠んだ歌も残っ
ている。

寛保2年（1742年）京

都の冷泉家より紀州藩に「古
歌に詠まれていた藤代の墨は
どうなっているのか」との間



藤代墨（海南歴史民俗資料館）

い合わせがあつた。

しかし、墨作りはとうに
絶え、知る者もなく、調
査されたということが

名高専念寺の全長という僧
の「名高浦四圍廻見」に記さ
れており、湯浅に残っていた

二つの古墨を提出したことが
「速水見聞私記」に墨の型と
ともに記されている。

その後、紀州藩の六代藩主
徳川宗直が当時の湯浅村に住



梅仙墨（海南歴史民俗資料館）

む橋本治右衛門に藤代墨の再
興を命じ、紀州藩の公用品と
され珍重されるようになった。

また、このころは「藤代
墨」から「藤白墨」へ、原料
も松煙から油煙へと大きく変
わった。

この藤白墨も天保13年
（1842年）に廃絶した。

その後、明治初期に入り田
辺の鈴木梅仙が藤代墨を研究
し、「梅仙墨」として名墨を
残しているが、梅仙没後途絶
えてしまった。



明治時代の墨作りの様子

春日神社
紀州松煙墨の書き初め

海南市にある春日神社は、朝
廷より正一位を与えられた格式
の高い神社で、聖武天皇から代々
の祈願所として厚い保護を受け
ていた。熊野古道の休息するこ
ろに設けられた九十九王子社
のひとつである「松代王子」が
春日神社に合祀されており、ご
神体はなぎの葉の形をした墨だ
そう。



春日神社で
は、「紀州古代
墨席上書初会」

という小中学生を対象とした書
き初め会を毎年元旦と2日に催
しており、松煙墨を墨汁にした
ものを使っている。松煙墨で書
かれた書は青みがかった艶のな
い黒色になり、味のある落ち着



松代王子が祀られているお社のご神体
は「なぎの葉」の形

この書き初め会は予約の必要
もなく、当日訪れても大丈夫と
のこと。古代から伝わる墨「紀
州松煙墨」をつかう感動を味わっ
てみては。



取材協力
三上秀信 宮司
お問い合わせ
春日神社
海南市大野中 577-1
TEL 073-483-7547

紀州古代墨の現代^{いま}

日本でただ一人、原料の松煙から松煙墨を作り続けている人物がいる。田辺市鮎川で墨工房「紀州松煙」を営む堀池雅夫氏だ。現在の墨作りとは…

松煙作りに使う松には、立木の皮をはいでしばらくおき、松脂がのつてきた部分を切り出して使う「生き松」と、自然と枯れた松を切り出す「落ち松」がある。今では松山自体が少なくなったため「落ち松」を集めて松煙を作る。

江戸時代には「障子焚き」といい、障子で囲った小さな部屋の中で松を燃やすことで、障子にたまった煤を集める方法が用いられた。現在は、障子の代わりに目の細かい金網が使われている。

松煙焚き

細かく切った松をゆっくり燃やすことで、煤が生じる。



煤とり作業

とったばかりの煤は空気を含むため、ふわふわしてとても軽い。



膠と練り込む

良質の膠。これを溶かして煤と練り合わせる。



型入れ

墨を成形する木型。堅くて木目の少ない梨の木が使われる。

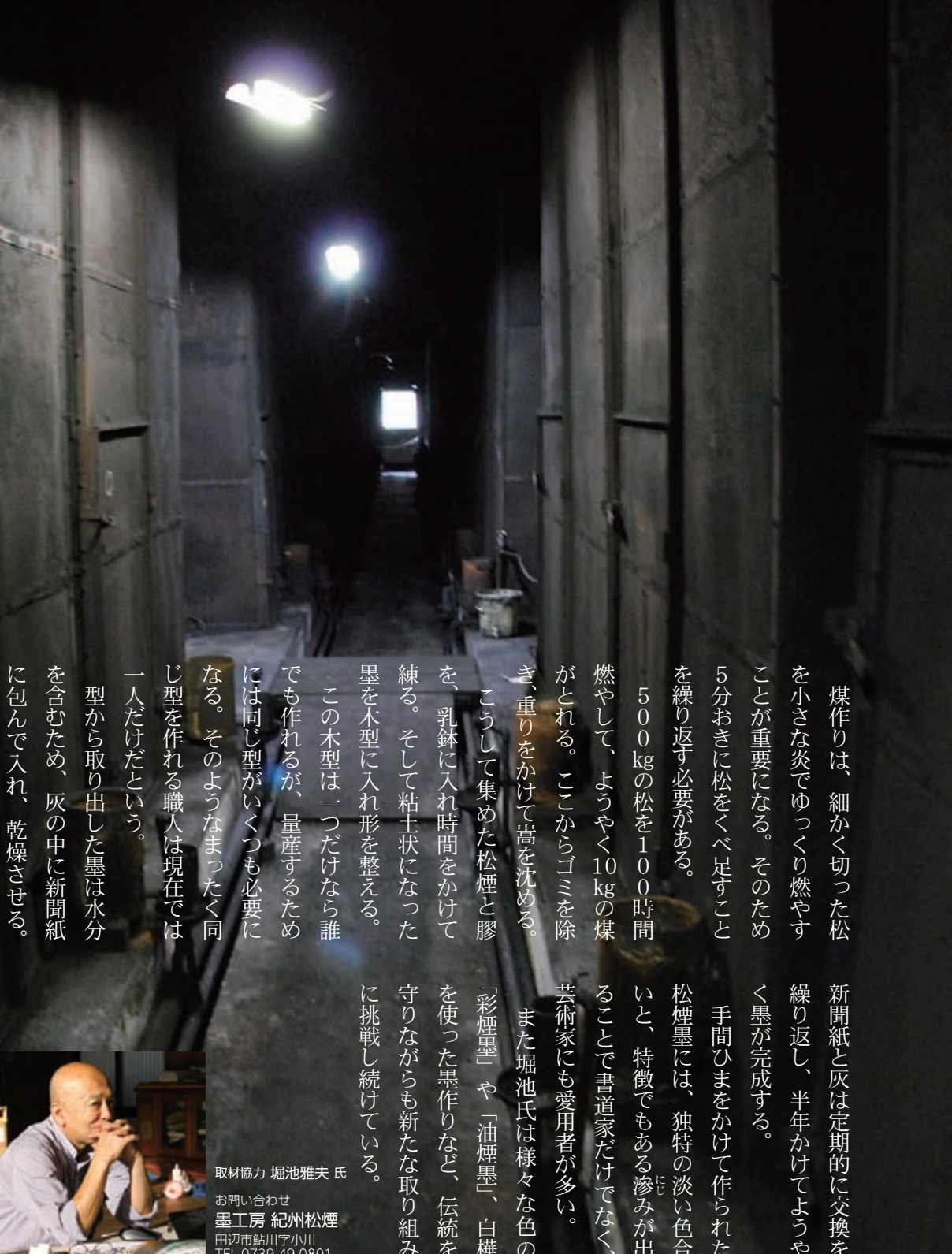


乾燥作業

灰は備長炭の炭がまからとれたもの。



完成



煤作りは、細かく切った松を小さな炎でゆっくり燃やすことが重要になる。そのため5分おきに松をくべ足すことを繰り返す必要がある。

500 kgの松を100時間燃やして、ようやく10 kgの煤がとれる。ここからゴミを除き、重りをかけて嵩を沈める。

こうして集めた松煙と膠を、乳鉢に入れ時間をかけて練る。そして粘土状になった墨を木型に入れ形を整える。

この木型は一つだけなら誰でも作れるが、量産するためには同じ型がいくつも必要になる。そのようなまったく同じ型を作る職人は現在では一人だけだという。

型から取り出した墨は水分を含むため、灰の中に新聞紙に包んで入れ、乾燥させる。

新聞紙と灰は定期的に交換を繰り返し、半年かけてようやく墨が完成する。

手間ひまをかけて作られた松煙墨には、独特の淡い色合いと、特徴でもある滲み^{にじ}が出ることで書道家だけでなく、芸術家にも愛用者が多い。

また堀池氏は様々な色の「彩煙墨」や「油煙墨」、白樺を使った墨作りなど、伝統を守りながらも新たな取り組みに挑戦し続けている。



取材協力 堀池雅夫 氏
お問い合わせ
墨工房 紀州松煙
田辺市鮎川字小川
TEL 0739-49-0801

徳川治宝侯が 愛した 瑞芝焼

はるとみ

江戸時代後期に花を咲かせた瑞芝焼は
明治維新の変革にのまれ 一度は衰退した
しかし その名の通り「芝」のように
力強くよみがえり
再び和歌山の伝統工芸として
光りはじめた

徳川家の御用窯

寛政8年（1796年）に
岡崎屋阪上重次郎が創業し、
紀州藩第十代藩主、徳川治宝
侯（1789〜1824年）
が徳川家の御用窯として緑
色青磁を焼かせたことから始
まる。「数奇の殿様」と呼ば
れた治宝侯はその瑞々しい青
磁に、おめでたい言葉「瑞」、

瑞芝焼

ずいしやき

踏まれても力強く鮮やかな緑
色を出す「芝」から「瑞芝焼」
という銘をつけたと言われて
いる。その銘からも治宝侯が
緑色青磁を気に入っていたこ
とが伺える。

明治に入り、廃藩置県に
よって紀州藩は廃藩となり、
藩の保護を失った瑞芝焼は、
明治7年（1874年）に
廃窯の憂き目を見た。

その復興

五代目窯元の故・阪上節介
氏は、瑞芝焼の復興に立ち上
がった。しかし、技術が伝承
されていない瑞芝焼をよみが
えらせるためには、陶芸を学
ぶことから始めなければなら
なかった。

美濃の窯元で2年間修行し、
昭和48年（1973年）9
月9日に窯を築構した節介氏
は、六代目阪上重次郎氏とと
もに江戸時代の瑞芝焼を訪ね
歩き、陶芸家で知られる故・
加藤唐九郎氏の協力も得なが
ら、緑色青磁の瑞々しい緑を
再現することに成功した。



阪上重次郎 氏／六代目瑞芝焼窯元



気品ある緑色青磁

緑色青磁は瑞芝焼を代表する陶磁で、深い落ち着いた緑に釉薬の艶やかさが加わり、なんとも気品のある瑞々しい緑である。その緑は、コバルトなどを調合した釉薬と鉄分を加えた粘土を焼成することによって表れる。焼成の方法によっては緑が茶色になる場合もあるという。

使われる粘土は、良質な原土数種類を混ぜたどろ水状のものをふるいに通し、粒子を均一にしたその土をさらに1



江戸時代の作陶風景

年半寝かせたものだ。

陶磁に施された繊細な浮き彫りと線彫りも瑞芝焼の特徴。彫りの深さによって緑色の濃淡を表現するのだが、数ミリの違いでさえ濃淡がきつく表れ下品になってしまう。仕上がりをイメージし、陶彫に注意することで上品な風合いを出す彫りの技術は、教えられて得られるものではない。

また、同じ条件で焼成してもその時々で緑の色合いが変化する。だから、窯出し作業は、まるで子どもが生まれてくるときのように「わくわく

する」そうだ。

重次郎氏は先代の作業を目で見て覚え、経験を積み重ねて技を培い、現在に至る。しかし、「先代たちを超える作品ができあがるまでは六代目として認められない」と自分を戒め、精進を続ける。

和歌山の歴史文化として

重次郎氏は瑞芝焼の伝承者という使命の傍ら、小学校での文化教育にも携わっている。土と戯れ、物を作ることで教え、自分たちの故郷にも素晴らしい文化があることを伝えていく。

「未だ納得した作品は1点もない」というほど、瑞芝焼の名に恥じない作品を作るため自身に厳しい重次郎氏。その根底には、「文化というのは200年、500年先に歴史に残っていくものであるから、確固たる瑞芝焼を創りたい」という気概がある。

「瑞草不凋」重次郎氏の好

きな言葉の一つである。「瑞々しい（めでたい）草は凋（しお）れることはない」という意味で、この言葉のように、凋（しお）れることのない郷土の文化として、瑞芝焼を根づかせようとしている。

瑞芝焼は、和歌山城下の土産物品店、紀三井寺の地場産業振興センターで見ることが出来る。
【お問い合わせ】
瑞芝堂 0734520512



紀州徳川家と表千家

和歌山には千利休から伝承された表千家の家元屋敷があったのをご存じだろうか。

桃山時代に千利休により大成された茶道。利休は豊臣秀吉の怒りをかって自刃したが、その利休の子「少庵」は蒲生氏郷の取り成しで千家を京都に再興した。

少庵の子「宗旦」（利休より三代目）はいずれの將軍大名にも仕官せず貧乏侘び茶に徹した。その宗旦の子「江岑」（三男）に家督が譲られ、表千家として紀州徳川家に仕官することになった。一方、「宗守」（次男）は武者小路千家、

「宗室」（四男）は裏千家として、表千家を本家とする三千家が成立する。

四代目江岑以降、表千家代々（十代まで）の家元は、明治維新に至るまで紀州徳川家の茶頭として仕えた。

表千家の屋敷があった三木町に、その名残として石碑が建てられている。石碑の表書は、現家元／「而妙齋」宗匠の御染筆。竣工／平成7年12月と表記されている。





④ 大神宮のクスノキ

《樹齢 1000 年余／幹周 15m／樹高 25m／和歌山県下3位の巨木》
地元では「だいじんさんのクスノキ」と呼ばれ、ご神木として人々の心のよりどころとなっている。



土蔵の板塀

白壁を風雨から守る黒い板を張りめぐらせた蔵。



⑤ 運行寺のソテツ

《樹齢 250 年余／幹周 1.2m／樹高 12m》
大きくうねった枝ぶりに感嘆。門の外からでもその姿がみえる。



秋葉公園への遊歩道

標高 54 m の秋葉山 (旧猿岡山)
山頂へつづく遊歩道。

粉河ぶらり大樹めぐり

北には紀泉高原、南には龍門山を控え、粉河寺を中心に門前町・宿場町として、古くから栄えた歴史深いまち「粉河」。

寺社などの歴史的建造物とともに、悠久の時を年輪に刻んだ樹木が多く存在し、まちの歴史を見つめ続けている。私たちより、はるか長い寿命を持つ樹木が語りかける、昔話に耳をかたむけよう。

粉河駅を出てすぐ目の前が、粉河寺への参道「とんまか通り」。道路は整備され、古い町並みの面影は少ない。駅を背に 500m ほど歩き、左折すると重厚な店構えの「鳴尾屋」がある。古い建物が点在する横道にそれ「運行寺」へ。枝をうねらすソテツに驚いた。細い路地裏を抜け、再び参道を北上する。前方には赤い大門、その左手前に鬱蒼と茂る樹木がみえる。樹齢千年余の「大神宮のクスノキ」だ。この樹にパワーを頂いて、西国三十三箇所第三番札所である「風猛山粉河寺」へ。

大門をくぐり、いくつものお堂の前を進む。階段を上って、大門とは対照的な佇まいの中門をくぐる。枯山水の石庭の後ろにある本堂が、崇高な姿をあらわした。本堂東側には「距木地のクスノキ」と呼ばれる大樹がある。本堂裏手の「十禅律院」へ向って、塗上門をくぐると大きなイブキの樹が出迎えてくれた。境内を後にし、中津川沿いを進んで遊歩道の坂道を登り、展望台から龍門山を臨むことができる。「秋葉公園」があり、秋葉公園前交差点から少し南下して橋を渡る。再び中津川沿いを南下。参道と中津川の間にも、古い家並みが多く残っている。地藏橋の向こう側にある「子安地藏」に寄り道して粉河駅へ戻った。



⑤ 大門 (国指定重要文化財) 1706 (宝永四) 年の再建
粉河寺の入り口に建つ三間楼門。
和歌山県では高野山、根来寺に次ぐ大きさといわれている。



いたるところにある路地裏
参道からそれ、細い路地裏を歩くと古い民家
があちこちに残っている。



② 鳴尾屋
重厚な竹まいの店構え。
かつての繁栄を偲ばせる。



① とんまか通り
粉河祭の太鼓の音を擬音化した
「とんまか」というネーミングが楽しい。
トンマカトンマカ…。

近畿最大級の
巨樹が実は
和歌山に!

十五社のクスノキ
(国指定天然記念物)
樹齢約600年 / 幹周13.5m / 樹高24.3m / 枝張25m
紀の川市のお隣、かつらぎ町にある笠田小学校に隣接している。
太い主幹を取り巻くように8本の支幹が立ち上がり、見事な樹冠
をつくっている。小学校の校歌にも歌われ、地域のシンボルとして、
人々に親しまれている。



JR 和歌山線から和歌山線で粉河行き又は橋
本行きに乗り、粉河で下車。所要時間 / 35
~ 38 分。運転頻度 / 昼間時 1 時間に 2 便。



⑪ 子安地蔵のクスノキ
樹齢不明 / 幹周 4.7m / 樹高 15m
中津川沿いの子安地蔵尊のそばに佇むクスノキ。



徳川治宝直筆の扁額



⑥ 中門 (国指定重要文化財)
1832 (天保三) 年の再建
十代紀州藩主徳川治宝直筆「風猛山」の扁額があげ
られている。内部には、四天王像を配して珍しい。



⑦ 本堂 (重要文化財) と名勝「粉河寺庭園」
本堂 1720 (享保五) 年の再建
西国札所の中で最大といわれる本堂。屋根が重なり合っ
て、複雑な建築構造になっている。本堂前の石庭は、石組みと
植栽をあわせた国内でも珍しい庭園様式。



⑧ 距木地のクスノキ
樹齢不明 / 幹周 7.7m / 樹高 20m
粉河寺の開祖である大伴孔子古が、この樹に距て
隠れ、鹿などを狙ったという寺伝がある。



⑨ 十禅律院のイブキ (ビャクシン)
樹齢不明 / 幹周 5.5m / 樹高 12m
ぜんそく・せき封じのお寺で知られる十禅律院
の境内にある。イブキ (ビャクシン) の大樹。



⑩ 秋葉公園
藤堂高虎の居城である猿岡城があったところ。
山頂には、城址碑が立つ。

図書館探検隊

和歌山県立図書館開館100周年記念事業として、2008年8月から始まった「図書館ウォッチング」は、主に小学生を対象に行われてきたが、今年からは「親子ウォッチング」など、一般向けのイベントとしても行われている。図書館ウォッチングが教えてくれる図書館の仕組みと歴史をのぞいてみよう。

図書館ウォッチングとは

普段は入れない図書館の書庫を見学したり、本のフィルム装備、本や雑誌のデータ作成など、本の整備や情報の調べ方を体験できる。

図書館をより身近に感じられ、本を大切に管理するために図書館がどのような工夫をしているのかが学べるイベントだ。



雑誌のデータ作成を体験

地下2階まである大容量の書庫を見学

100万冊を収蔵できる図書館は、書庫が地上2階から地下2階まである。各階、各書架は年代や内容で分類されている。書架でも新聞などの大型本を置くための書架もある。



ネズミ返しで守られた貴重書庫

地下の貴重書庫は、大きな金庫室のようだ。入口は厳重で、虫やネズミなどの侵入を防ぐ「ネズミ返し」の仕組みがある。

重厚な扉を開けて中へ入ると古い本ののにおいに包まれた。今まで見てきた書庫とは違う雰囲気漂う。江戸～明治初期の書物がたくさん収蔵されており、歴史を感じさせる。本を管理している整理番号等は、紙に印刷して挟み、直接本には貼らない。また収蔵したときより状態が悪くならないよう年一回消毒もする。その中でも、特に状態が悪い書物は袋に入れ、いたまないよう大切に保管されている。



金属活字の最貴重書

貴重書庫の中に、日本で初めて金属活字で印刷された本がある。

徳川家康が駿河に住んでいたときに作らせた本だ。江戸時代は木版が主流だったが、あえて金属活字で印刷されたもの。



火災から本を守る

もし、火事になったら、たくさんの貴重書物を持ち出さなくては燃えてしまう・・・という心配は無用！

この図書館にはハロゲン化物消火設備があり、火災のときは、本をぬらさずに火を消し止めることができる。



県立図書館の歴史

県立図書館は102年前・明治41年（1908年6月）に和歌山城のある和歌山公園内に建てられた。当時は、「閲覧無料」と看板に掲げられていた。明治時代には閲覧が有料の図書館もあり、「閲覧無料」をPRする必要があったからだ。

当時、閲覧方法は読みたい本を職員に伝え書庫から取ってきてもらう閉架式だったが、現在は本を手にとって読みたい本を選べる、開架式になった。県立図書館所蔵第1号は明治41年3月31日に登録された「日本宗教史」だ。ポロポロの外装は新装されたが、中身は当時のままで、今も閲覧できる。

昭和13年（1938年6月）に和歌山公園内に建て替えられ、当時の取り組みとしては新しい独立した児童室があった。

平成5年（1993年7月）、現在の西高松に複合施設「きのくに志学館」として移転開館した。



司書が選ぶ郷土の本

県立図書館の司書おススメの郷土本を3冊紹介していただいた。



『城下町和歌山百話』

著者 三尾功／和歌山市

(一九八五年刊／増補改訂版 二〇〇一年宇治書店刊)

和歌山城下町の歴史について、写真や図を取り入れながら、分かりやすく書かれた本です。「なぞの人 鈴木孫二」「ぶらくり丁」のことなど、興味深いテーマに即して百の史話が語られています。和歌山市史編纂に携わった著者が、編纂の過程で収集した確実な資料に基づいて執筆しています。出典についても明記されているので、興味のある方はさらに研究を深められます。

『紀州史散策』

著者 神坂次郎

発行所 有馬書店

(一九七六年刊)

和歌山の歴史について、物語仕立てに描いたのがこの本です。全五巻ですが、それぞれの話は短いので、少しずつでも読めます。和歌山市在住の著者が実際に行った場所や聞いた話を織り交ぜながら、生き生きとした表現で書かれているので、一緒に各地を散策しているような雰囲気味わえるのではないのでしょうか。歴史小説として楽しみながら、和歌山の通史を学べる本です。



『名臣伝』

著者 津本陽

発行所 文藝春秋

(一九九二年刊)



天下分け目の関ヶ原から十九年、弱冠十七歳で紀州五十五万石の藩祖となった徳川頼宣。血気盛んな若殿さまを命がけで守った十四人の名臣たちの、壮絶な生き様を描いた歴史小説です。軍船十二艘を渡り船で沈めた賛掃部、百騎の敵に槍一本で立ち向かった山本正春など、紀州藩の始まりに、このように破天荒で、忠誠心の強い家臣がいたとは驚きです。文庫版、大活字版もあります。

出張講座を開催しています！

県立図書館では、本の読み聞かせや、本の整備の仕方を教える出張講座を行ったり、学校や団体への本の貸し出しも行っている。また、紀の国（木の国）にちなんで、木に関する本を集めている。



Information

和歌山県立図書館

〒641-0051 和歌山県和歌山市西高松一丁目 7-38

TEL: 073-436-9500 FAX: 073-436-9501

開館時間：火曜日～金曜日 10:00～19:00

土曜日・日曜日・祝日 10:00～18:00

児童室は全ての開館日において 10:00～17:00

休館日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）

毎月第2木曜日

貴重書、一般図書を蔵書している。

1人5冊までの図書を借りることができる。※貸し出し期間は2週間まで。



今回掲載した図書館ウォッチングの内容は、2010年10月15日(金)に催された「秋の図書館ウォッチング・資料整備の部」を取材したもの。

図書館ウォッチングは2時間程度で、今年は4月から11月までで15回行われた。



昭和13年の図書館を写真で見る

和歌山県の道の駅を巡る

シリーズ道の駅②

「ひと目百万、
香り十里」
見事に梅づくし

「みなべうめ振興館」

「梅はどこから日本にやって来たのか？」をご存知だろうか。答えは「うめ振興館」を訪ねて欲しい。そこは、梅生産量日本一を誇る町・みなべ町の学べる道の駅にある。

1階は日本最大級の銅鐸の出土や中世の山城などが展示されている歴史ゾーン、みなべ町が地域の重要な拠点だったことが伺い知れる。

2階は梅資料ゾーン。梅の歴史を追って2階へ足を進めると、梅林大型パノラマ模型や50種もの梅花、梅干し実物展示など様々なブー

スが開示されている。3階が道の駅みなべ川、物産品コーナーは、見事に梅づくしだ。屋上は展望台になる。どこまでも梅林のパノラマ風景が広がる。是非とも開花時期に訪れ、眼下を流れる南部川と梅花の春を味わいたいものだ。



梅味のソフトクリーム
甘さ控えめで
あっさりとしている



みなべうめ振興館

【所在地】和歌山県日高郡みなべ町谷口538-1
【休館日】毎週火曜日(火曜日が祝日の場合、翌水曜日)
年末(29・30・31日)休業、※2月中は無休
【開設時間】9:00~17:00
【お問い合わせ】TEL 0739-74-3444
FAX 0739-74-3665
【アクセス】阪和自動車道みなべICより、
国道424号を龍神方面約5分

※梅花は1月下旬から2月下旬ごろまでが見ごろ。



編集後記

「石の上にも3年」・・・年2回発行している弊誌も6号を数えました。こうやって継続できるのも、スタッフ(ボランティアです)がいて、取材に協力して下さる方々がいて、そして、読者のみなさんが愛読して下さるおかげです。心より感謝申し上げます。

今回は「墨」にスポットをあてました。和歌山の墨は昔、日本のトップブランドだったそうです。時代が、そして、求められるものが変わっても、日本、いいえ世界に誇れるトップブランドを、後継する私たちも生み出していきたいですね。他にも、瑞芝焼の復興に傾注する六代目の姿、粉河の巨木散策、県立図書館の舞台裏、ちょっと珍しい道の駅「みなべうめ振興館」などをご紹介します。そして、クイズへのご応募と弊誌へのご要望・ご感想をお忘れなく!

では、次号は夏にお会いできることを楽しみにしております。

第6号編集長 岡 京子

クイズとアンケートで当たる!

クイズにお答え頂いた方の中から抽選で「藤代墨」を10名様にプレゼント!!

ハガキ
見本

- ① ご住所
- ② お名前
- ③ 年齢
- ④ 性別
- ⑤ クイズの答え
- ⑥ ほうぼVol.6の入手場所
- ⑦ 小誌のご意見・ご感想

和歌山市市小路153-1
紀ノ川ビル2F
株式会社ウイング
「ほうぼ・クイズ&プレゼント係」



問題

徳川治宝侯が愛した
焼き物は何でしょうか?

- ① 有田焼
- ② 瑞芝焼
- ③ お好み焼

ヒント
本号のどこかに
答えが載っています。

Vol.5の答えは
「③真田紐」でした。

応募要項

官製ハガキ、又はメールにて ①ご住所 ②お名前 ③年齢 ④性別 ⑤クイズの答え ⑥ほうぼVol.6の入手場所 ⑦小誌のご意見・ご感想を必ずご記入の上、下記へふるってご応募ください。

1次メチ:2011年2月末日(当選人数/5名様) 2次メチ:2011年4月末日(当選人数/5名様)

■ハガキ: 〒640-8464 和歌山市市小路153-1 紀ノ川ビル2F 株式会社ウイング「ほうぼ・クイズ&プレゼント係」
■メール: houbo@w-i-n-g.jp ※応募くださいました個人情報は、プレゼントの発送及び弊社からのお知らせ以外には使用しません。

賞品提供: かいなん夢工房



株式会社ウイング/印刷物の企画・デザイン・製造を主体とし、出版サービスや印刷付帯サービス、さらにデジタルメディアなどの活用を視野に入れた「新しい印刷業」を目指している企業です。おかげさまで2010年6月、弊社は設立30周年を迎えました。[沿革] 創業1972年。設立1981年。2005年に中央印刷株式会社から株式会社ウイングに社名変更。本社、和歌山市権取。従業員55名。

皆さまに支えていただきましたことに感謝の気持ちを込めまして「30周年感謝還元キャンペーン」を実施しております。

詳しくはウェブで検索→ <http://w-i-n-g.jp>

ウイング 和歌山

お問い合わせ先 ☎0120-13-6700

ほうぼのバックナンバーをウイングホームページでダウンロードできます。